

松前重義賞 学術部門

〔再録〕

「自閉症の成因と治療に関する臨床的研究」

筆者が精神科医になって四半世紀が経過したが、医学生であった二十歳の時、自閉症児療育のためのボランティア活動にはまりこんで以来、これまで一貫して自閉症に対して強い関心を持ち続けてきた。精神科医になったのも児童精神科医を目指していたからであるが、このような動機と契機から、いわば必然的に筆者の研究の中心は、自閉症児のその後の成長過程とそこで繰り広げられていく様々な人生模様の精神病理現象へと集約されていったように思う。

東海大学健康科学部に赴任(一九九四年)するまでのおよそ二十年間(福岡大学、大分大学在任中)の臨床研究では、「自閉症の精神発達経過に関する臨床研究」で医学博士号を取得し、その後を追跡調査によって、二〇一例の自閉症追跡調査研究を自閉症研究の専門国際誌「*Journal of Autism and Developmental Disorders*」に一九九二年発表した。本論文はこれまでの自閉症の予後像を塗り替えるほどのインパクトを世界中に与えたように思う。さらに当時、青年期・成人期自閉症を対象に彼らにみられる多様な精神病理現象を発達の視点から見つめ直す試みを蓄積したが、その間の仕事は小書『自閉症の発達精神病理と治療』(岩崎学術出版社、一九九九)として公刊されている。



小林 隆児 教授
(東海大学健康科学部)

を同学部に創設し、新たな発想と枠組みの中で臨床的研究を開始した。これまで医学の基本的理念でもある要素還元主義のもとに疾病の原因を個体の中に見出すとする視点から脱却し、子ども個人にのみ焦点を当てるのではなく、素質(nature)と養育環境(nurture)の相互作用の結果として病態を捉え、両者の関係性の力動的な変化をつぶさに捉え、自閉症という病態を子どもと養育者との「コミュニケーションの問題とみなし、その「関係障害」に対して介入を試みている。この接近方法を筆者は「関係障害臨床」と称し、人間発達は個体能力中心とする見方すなわち「個体能力発達」に代わって、関係を中心とする「関係発達」の視点から新たな理解と理論構築を目指している。

これまでの成果の一端については、小書『自閉症の関係障害臨床—母と子のあいたを治療する—』(ミネルヴァ書房)としてまとめている。本書ではMIUでの初期の臨床研究で蓄積した三例の臨床事例を通して、関係への介入によって、母子コミュニケーションがどのように変容していくかを詳細に提示しながら、関係発達の様相を描き出し、そこで取り出された関係発達の新たな視点を論じている。本書は乳幼児期の自閉症に関する筆者の治療論といえるものであるが、同じ視点に立つて、青年期・成人期自閉症にみられる深刻な行動障害に対して、福祉施設の職員との共同研究をも遂行し、小書『自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—』(岩崎学術出版社)としてまとめている。本書が青年期・成人期自閉症に対する治療論である。これら二冊の書によって、筆者は、自閉症の成因に対する仮説を提示しながら、乳幼児期から青年期まで、生涯発達を見通した自閉症治療論を展開している。

今後は、関係障害の実態をより鮮明に描きながら、「関係障害」の成因、すなわち対人コミュニケーションがなぜ破綻するのかを明らかにし、人間関係の成立基盤に関する理解を深めていくことを夢を描くこと。